

## ■プレスリリース

### 当事者視点から始まる「虐待防止アクション」

文・今一生(フリーライター&編集者) [conisshow@gmail.com](mailto:conisshow@gmail.com)

厚労省は2004年から11月を「児童虐待防止月間」と定め、家庭や学校、地域等で児童虐待問題に対する深い関心と理解を得ることができるよう、児童虐待防止のための広報・啓発活動などの取り組みを実施してきました。

でも、全国の児童相談所へ寄せられる虐待の相談件数は、初調査の1990年から27年間で約130倍に増え続け、昨年は13万件を突破。一度も減らせませんでした。政府は、虐待防止策の失敗を潔く認め、防止策を抜本的に見直す頃合いでしょう。

そこで昨年、親から虐待された10～50代の100名が執筆した公募手紙本『日本一醜い親への手紙 そんな親なら捨てちゃえば?』(dZERO)を Create Media 名義で企画・編集した**今一生**は、虐待防止策を根本的に見直す活動を始めました。

その活動とは、親や教師、児童福祉や臨床心理の専門家の第三者が虐待を他人事として同情し、失敗し続けてきた従来の防止策ではなく、**虐待された当事者が自分事として共感できる子ども視点で虐待をとらえ直した防止策を生み出す**というもの。

今一生が民間の社会起業(ソーシャルビジネス)による防止策の事例や、当事者ニーズに基づく議会・行政への提言などの新しい試みをネット上で語り、「全国でノーギャラ講演をしたい」と伝えると、2017年秋、全国19か所から講演依頼が集まりました。

その主催者はイベント未経験の一般市民。虐待ゆえの精神病患者も多かったのです。今年は講演料を交通費・宿泊費込みで1回10万円に変えましたが、市民開催が10か所で決定。彼らは開催コストを賄うため、寄付や入場料を増やそうと奮闘中です。

<https://letters-to-parents.blogspot.com/2015/05/tour2018.html>

この講演イベントには、3つの価値があります。

- ① 手紙本の朗読によって、虐待された当事者の痛みを自分事として感じ取れる
- ② ソーシャルビジネスや議会・行政への働きかけなど誰もがができる防止策を学べる
- ③ 講演後のお茶会では孤立していた当事者どうしが会い、新たな防止活動が増加

今一生は 2017 年秋から『STOP! 子ども虐待防止 100 プロジェクト』を推進し、講演以外にも、虐待された痛みを訴える歌を公募し、手紙本の YouTube での朗読を呼びかけ、政治家へ本を手渡していくなど、誰もがができる活動を提案・実行してきました。

こうした「虐待された当事者の痛み」を伝える動きに触発される形で、アートによって子ども虐待の深刻さに気づいてもらう試みも広がっています。

一つは、名古屋在住のデザイナーの**浅色ミドリ**さんが主催する『毒親フェス in アートフェスティバル』(略称、毒親アートフェス)。<https://dokufes.com/art-fes/>

毒親アートフェスは、親から虐待された当事者 100 人と当事者ではない 100 人から平面作品を集め、11 月 22~25 日に名古屋の画廊で一挙展示するもの。

すでに、滋賀県の大津市市民活動センターでの巡回展も決まっています。

絵画・イラスト・マンガ・写真など平面作品なら何でもよく、応募〆切は 11 月 10 日。

二つ目は、東京在住の発達障害者、**田中ハル**さんが始めた「虐待サバイバー写真被写体募集 in 東京」というプロジェクト。<https://kojikoji.themedia.jp/>

「あなたの『生きている』が誰かの『生きる』決意に」をコンセプトに、ネット上で「親からの虐待を生き延びた人」を公募。8 人まで撮影が終了し、被写体になった全員が web 写真展に顔も名前も自筆の文章も公表(笑顔が多いことに驚くかもしれません)。

以上、3 名の活動に共通しているのは、「**親から虐待された当事者の視点**」です。

浅色さんも田中さんも男性で、虐待サバイバーであることをネットで公表しています。

今年は 5 歳で虐待死でなくなった結愛ちゃんの痛ましい事件が話題になりましたが、その年頃から子どもはガマンを覚え、「親に虐待されてもガマンが当たり前」になるため、苦しい気持ちを誰にも訴えられないまま大人になる人がほとんどです。

そのため、虐待の被害を自覚するのは、結婚・出産・子育てがひと段落する 30 代後半からが他の世代より圧倒的に多く、そこで被虐待の当事者はまるで夢から醒めたように、自分の弱さばかりを責め続けた積年の心の重荷をようやく下ろすのです。

従来の虐待防止の取り組みは、第三者による虐待後の行政連携が中心でした。

でも、障害者や LGBT が自分たちの権利として社会制度を変えてきたように、親から虐待された当事者が「**当事者主権**」に目覚め、**自分の幸せの形を(親でも世間でもなく)自分自身で判断・決定・実行していける姿**こそが、すべての世代に自らの被虐待を気づかせ、自分たちが子どもの頃にほしかった虐待防止策を明らかにし、今後の悲劇を避ける知恵になるのでは? ぜひ、以上の取り組みを取材してください。